

◆井川 丹 (5年) Akashi Ikawa

井川 丹：サンサーラ (演奏時間約9分)

1984年埼玉県生まれ。埼玉県立川越高等学校卒業。

現在、東京藝術大学音楽学部作曲科に在学中。

これまでに作曲を林きさら、山本裕之、川井學、小山薫、浦田健次郎の各氏に師事。

サンサーラ (samsara) は、古代インドのサンスクリット語で「流れ」や「廻り巡ること」といった意味をもちます。

作品は、全体の約4分の1を占める導入部と、一對の長大なクレッシェンド・デクレッシェンドを形成する部分の二部構成になっています。また、全体を通して、水から連想される様々な動的イメージを音の動きに置き換えることから楽想を得ました。

冒頭のひそやかなクラリネットの単音に始まり、そこへ不規則に重なる様々な音色が、それでいて有機的に、絡まり、解け、滲み合いながら次第に大きくなうねりとなってゆきます。滴り落ちた一雫の水が、ひとすじの流れとなり、いつしか川となりゆくように。

そして、川がその流れを強めながら海を目指すように、音楽も徐々に拡がりを見せ、荒々しいトゥッティの響きへとなだれ込みます。

やがて、荒れ狂う海も次第に鎮まり、穏やかな表情を見せ始めます。ここで冒頭の楽想を想起させる響きがきこえ、音楽はふと空を想い、その動きを止めます。

青空の雫であった頃を思い出すかのように――

(井川 記)

◆中桐 望(3年) Nozomi Nakagiri

J. ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 二短調 作品15 (演奏時間約50分)

岡山県生まれ。岡山城東高校出身。

第17回吹田音楽コンクールにてソロ部門第1位、デュオ部門第2位(最高位)を受賞。

第2回野島稔・よこすかピアノコンクール入選。

これまでに岡山フィルハーモニック管弦楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団と共演。

2008年、学内にてアリアドネ・ムジカ賞を受賞。芦田田鶴子、角野裕の各氏に師事。

1854年、ブラームスの才能を称賛して世に紹介した、ブラームスの恩人であるシューマンが、ライン河に身を投じて自殺をはかるという衝撃的な事件が起こる。

ブラームスはシューマン家にかけて、一家に援助の手をさしのべ、2年後のシューマンの死までシューマン家を支え、妻のクララ・シューマンとも親密な交際をするようになるのである…。

そのような中で、この協奏曲は最初、2台のピアノのためのソナタとして原曲が作られた。ブラームスは、優れたピアニストであったクララと何度かこのソナタを試奏していくうちに、ピアノという形に不満を抱きはじめ、交響曲に書き直そうとオーケストレーションに取りかかるが、この作業に行き詰ってしまう。

しかし1855年に、これをピアノ協奏曲に転用しようと自身で思いつき、第1楽章だけがそのまま活かされ、続く第2、第3楽章は何度も入念に手を加えながら、まったく新しく作曲しなおされた。

こうして、ブラームスの最初の大作、ピアノ協奏曲第1番二短調は作り始めてから4年後の1858年にやっと全曲の姿がととのえられたのである。

第1楽章：Maestoso 二短調 6/4拍子 協奏的ソナタ形式

ティンパニの強打とともに、マエストーソにふさわしく劇的に第1楽章は幕を開ける。

シューマンの自殺未遂への衝撃、また恩人であるシューマンの愛妻クララへの狂おしいほどの愛情…懊悩や煩悶、激情といった青年ブラームスの感情が見事に表現されている。

第2楽章：Adagio 二長調 6/4拍子

ブラームスは、この曲に関してクララに、「あなたの柔らかな肖像画を描いていますが、それはアダージョになるはずで」と手紙を書いている。

最初、ブラームスの手で、「Benedictus, qui venit in nomine Domini」(ラテン語で「主の御名の下に来たれる者に祝福あれ」と記されていたが、後にとり除かれた。これは、シューマンの死後の平安を祈り、夫を喪ったクララの悲しみを慰めようとしたものだと言われている。

第3楽章：Rond. Allegro non troppo 二短調 2/4拍子 ロンド形式

独奏ピアノの精力的な主題に始まるこの楽章は、情熱的で躍動感に溢れている。

“quasi Fantasia (幻想曲風に)”と記された短いカデンツァの後に二長調となり、曲は力強く終結される。

(中桐 記)